

【資料紹介】

新穂地区 清水寺下屋敷遺跡出土の

中世陶磁器一括資料について

相羽 理恵

はじめに

清水寺は、新穂大野にある真言宗寺院で、「清水寺由緒」によると大同3(808)年の開基とされる。境内に配置される15棟の堂宇のうち、本堂、仁王門、中門、鐘楼は佐渡市の有形文化財(建造物)に指定されている。

清水寺本堂から長い石段をおりたところに下屋敷跡と伝わる地点があり、昭和39(1964)年に中世陶磁器がまとまって出土した。龍泉窯青磁稜花皿、瀬戸・美濃天目茶碗、瀬戸・美濃灰釉皿の組み合わせで、清水寺に関係した有力者の存在がうかがえる優品である。過去に写真で紹介されたものの、実測図は掲載されたことがなく、佐渡の中世を語るうえで重要な資料として、今回実測し再評価を試みようとするものである。

資料紹介

下屋敷遺跡(新穂大野字下屋敷138番地)は、小佐渡山地から国中平野へと流れる大野川左岸に位置する。清水寺直下の下屋敷跡と伝わる地点で、東から南東にかけての山中は新穂銀山跡の遺構が広がる一帯である。

昭和39(1964)年12月に龍泉窯青磁稜花皿1点、瀬戸・美濃天目茶碗1点と瀬戸・美濃灰釉皿17点が出土した。出土状況は不明であるが、すべてほぼ完形



清水寺下屋敷遺跡(新穂大野 138 番地)

で¹残りがよく、埋納行為があったことを想起させる。第1図に3分の1トレース図を示し、以下に所見を示す。編年は『瀬戸市史』を中心とした藤澤氏の瀬戸・美濃大窯製品編年表に拠っている。

1は中国龍泉窯青磁稜花皿で、ゆるい波状の口縁端部に3条の沈線を施す。見込み中央に印花技法による草花文を施すが、釉が厚く不鮮明である。高台内側には釉は施されない。15世紀第4四半期から16世紀前半の所産と考えられる。

2は瀬戸・美濃天目茶碗で、削り出しの袂り高台が特徴的である。瀬戸・美濃大窯分類の削り出し輪高台D類に近いと考えられ、高台周辺に薄い錆釉が観察できること、体部の開きが丸みを帯びていることから、大窯第1段階後半(16世紀第1四半期)に位置づけられる。

3～18は灰釉端反皿で、3～8は見込み中央に16弁の菊印花文が施される。器高・口径から大きく2つのまとまりができると想定されたため、A群・B群の2群に分類した。

A群(3～7、9～13)は器高が2.5～2.8cmで内湾気味に立ち上がる。口径はおおむね11cmを越える、大ぶりの一群である。高台端部・口縁端部は丸みを帯びており、大窯第1段階後半(16世紀第1四半期)に位置づけられる。

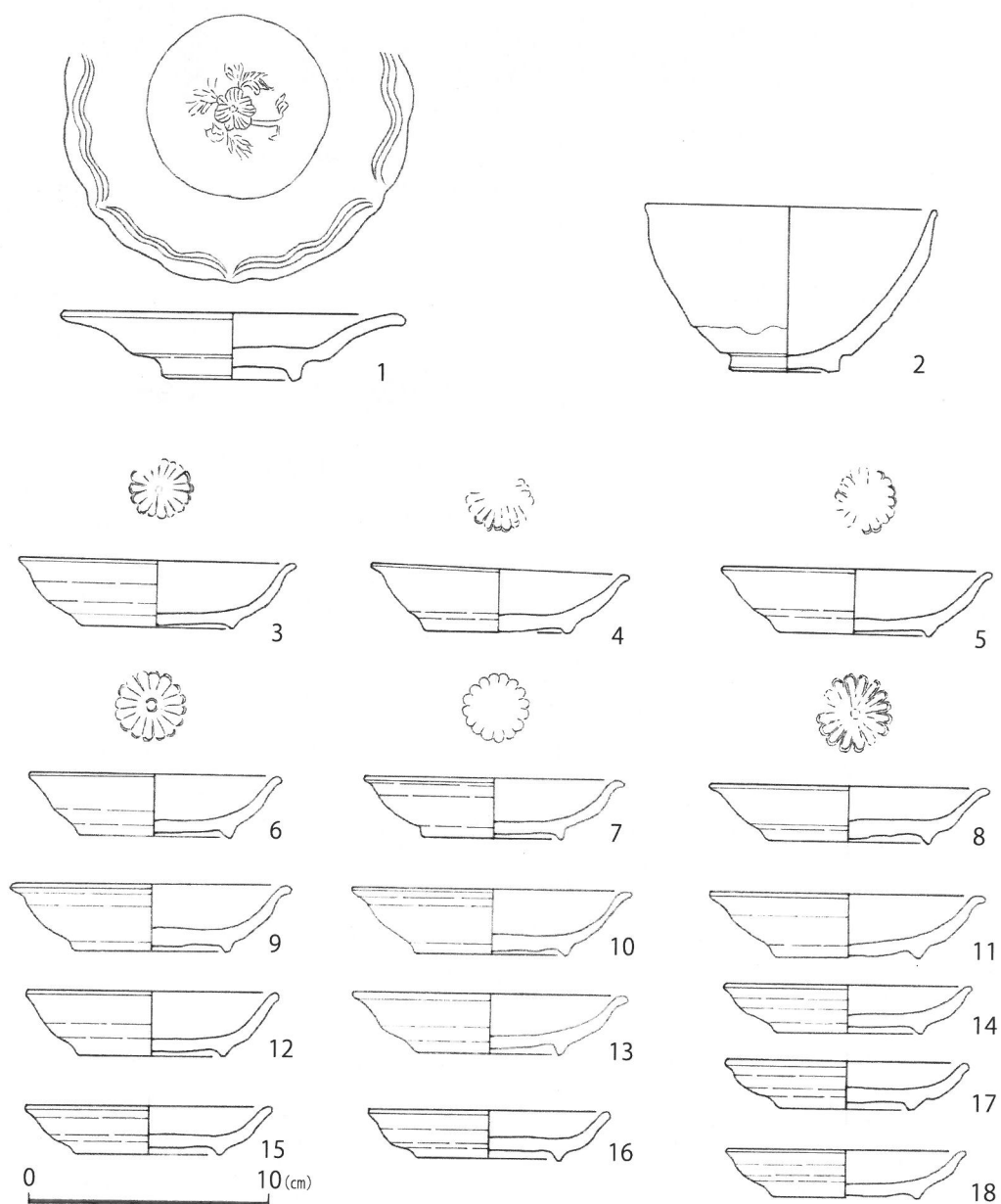
B群(14～18)は器高が2.0cmと低く、口径は10.2cm～10.4cmと小ぶりで規格性が高い一群である。A群より時代が下ると考えられるが、さほど時期差はないという印象を受ける。

8のみ器高が2.3cmとA群とB群の中間の値を示すが、口径(11.8cm)はA群に収まるものである。

輪ドチ痕は9、10、12、14～16で確認できる。17のみ内面見込み部が無釉である。

総じて、青磁稜花皿が古手で15世紀までさかのぼる可能性があり、天目茶碗、灰釉端反皿A群は大窯第1段階後半(16世紀第1四半期)の所産、B群はA群より新しいがおおむね16世紀の前半におさまると考えられる。16世紀第1四半期を中心とする良好な一括資料といえることができる。

1 17点のうち1点は半分に割れた状態で遺存率が低く、口縁部の残りがわずかであったため、今回の計測・図化からはずし、16点についてのみ図化を行った。



第1図 清水寺下屋敷遺跡 出土遺物(S=1:3)

第1表 清水寺下屋敷遺跡出土土器観察表

No.	資料名	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	No.	資料名	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)
1	青磁稜花皿	14.4	2.8	5.8	10	端反皿	11.8	2.7	6.4
2	天目茶碗	12.2	6.9	4.4	11	端反皿	11.4	2.7	6.0
3	菊花灰釉端反皿	11.6	2.8	6.4	12	端反皿	10.6	2.7	6.2
4	菊花灰釉端反皿	11.0	2.8	6.0	13	端反皿	11.6	2.5	6.2
5	菊花灰釉端反皿	11.2	2.7	6.4	14	端反皿	10.4	2.0	6.2
6	菊花灰釉端反皿	10.4	2.6	6.4	15	端反皿	10.4	2.0	6.2
7	菊花灰釉端反皿	11.0	2.5	6.0	16	端反皿	10.2	2.0	6.0
8	菊花灰釉端反皿	11.8	2.3	6.8	17	端反皿	10.2	2.0	6.0
9	端反皿	11.8	2.8	6.4	18	端反皿	10.0	2.0	6.0

おわりに

江戸時代より前の清水寺の沿革については不明な部分が多く、本尊の眷属として祀られた二十八部衆と雷神像が平安時代後期にさかのぼること、明応9(1500)年銘の鰐口が寄進されていることなどから、長い間人々の信仰を集めていたことがうかがえる。東に広がる新穂銀山に関しては16世紀に開発された鶴子銀山と同様の名称を持つ「百枚間歩」が存在することなどから、遅くとも16世紀後半には開発が始まったとされ、清水寺との関係が伝えられている。

今回の資料は、『山と川と大地佐渡大野史』や『新穂銀山の時代－新穂銀山と考古資料からみた新穂地区－』において写真で紹介されている。出土状況が不明で言及できることは多くないが、破損が少なく非常に良好な状態で、組物として埋納されていたことが推察できる。信仰に伴う埋納行為があったのか²、何らかの戦災を逃れるために埋納されたのか、誰が、どのように使い、今日まで伝わってきたのかについては明らかにしえないが、16世紀はじめごろの清水寺一帯の勢力を物語る貴重な優品といえる。

中世の研究については、文献をはじめとした資料の少なさから、日蓮、世阿弥をはじめとした流人に言及したもののほか、荘園・国衙や守護・守護代、地頭・地頭代の関係など土地支配についてのもの³が主流をなしていた。近年、新穂歴史民俗資料館で開催された新穂銀山展(2022年)、新穂中世モノ語り展(2023年)等により、別の角度から徐々に佐渡の人々の活動が明らかになってきたといえる。考古資料は断片的で課題も多いが、一つ一つの資料を丹念に調査し位置づけることで、具体的な姿にせまる道筋を見出す一歩となると考えられる。今回の報告がそうした研究の一助となれば幸いである。

本報告にあたり、柏崎市教育委員会の伊藤啓雄氏に貴重なご助言を多数いただいた。文末ながら感謝申し上げます。

参考文献

- 大野郷土史編纂委員会1997『山と川と大地 佐渡大野史』
- 財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター2001『瀬戸大窯とその時代』
- 佐渡市世界遺産推進課2022『新穂銀山の時代－新穂銀山と考古資料からみた新穂地区－』
- 佐渡市世界遺産推進課2023『中世佐渡国モノ語り－考古資料にみる中世のくらし－』
- 田中圭一1993『講座日本荘園史6 北陸地方の荘園 近畿地方の荘園1』吉川弘文館
- 田中 聡2000「鎌倉時代の佐渡－本間氏の周辺－」『日本の中の佐渡』両津市郷土博物館
- 田村 裕1998「中世佐渡の守護・地頭制と荘園・公領」『第十四回全国天領ゼミナール資料集』金井町教育委員会
- 藤澤良祐1993「瀬戸・美濃系大窯製品の流通」『瀬戸市史陶磁史篇 四』
- 山本 仁2006『村の中の中世－佐渡ヶ島－』郷土出版社

² 新潟県の中では阿賀野市の華報寺旧境内で仏像や仏具とともに中国製天目茶碗・中国製青磁皿などが埋納された事例があるほか、白根市の馬場屋敷跡でも青花皿の埋納が確認されている。

³ 田中圭一1993、田村1988、田中 聡2000、山本2006など。

はじめに

佐渡は「遠流の地」として広く認知されてきた。しかし、北緯38度線が島の中央を通り、寒・暖両地の動植物を目にすることができ、また食も豊かである。江戸期には相川金銀山の開発で全国から多くの人やモノ、文化の交流が盛んになっていった。「遠流の地」という暗いイメージとは対照的に豊かな土地柄である。佐渡を観光で訪れる人には、どのように映っているのだろうか。

「佐渡観光の始まりは日蓮」といわれて久しいが、佐渡観光と日蓮の関係性や佐渡観光で起こった問題などを昭和30年頃を中心に、当時の「佐渡新報」や観光パンフレットなどをもとに概略を見てみたい。

佐渡観光の始まり

現代の観光旅行は、日本に進駐した連合軍将兵が、日本駐在中に日本の代表的な観光地を回ったことが始まりといえよう¹。このことが、昭和23年8月に進駐軍関係、外国人観光客、冠婚葬祭、学術研究、学校見学、修学旅行など一部の許可となったが、事実上大型観光車による旅行を認めた形となった。

新潟交通でも佐渡を観光地にするため、昭和23年4月に3台の観光車が運行を開始した。²

この観光車を「25人乗り、ロマンスシートの可愛い観光車が出来上った。色については数百趣の中から、佐渡の風景にマッチする色が選ばれ、タメ色を主体とした現在の色に決定した」³と記されている。当時の日本の自動車産業は復興の途中であり、観光車を作れる工場も稀であったことから、観光車の導入には佐渡観光への期待の高さが伺える。佐渡では観光コースを設定、当時はまだ旅行者は外食券や米を持って歩かなければならない時代であったが、日蓮の遺徳を偲ぶ宗教団体などが新しい観光車で佐渡を回った。のちに「佐渡観光のはじまりは日蓮」⁴といわれるようになったきっかけであった。



『新潟交通20年史』より

佐渡と日蓮

佐渡は、神亀元(724)年に「遠流の地」に定められて以降、順徳上皇・日蓮・世阿弥など多くの皇族や文人、知識人などが配流された。中でも日蓮は、非常に影響力が大きく、今日に至っても日蓮系の宗教団体が数多く存在し、佐渡島内の日蓮に関係する史跡・霊蹟・名所等を訪れる信者や観光客が多い。

日蓮の生涯を考え方や自身の発言などから大きく「佐前・佐渡・佐後」と分けられ⁵、わずか足かけ3年の在島ではあったが、日蓮の生涯の中でもっとも大きな変化をもたらした地であり、日蓮信者にすれば佐渡は「聖地」の一つといえるだろう。

日蓮が「佐渡国に遣はされしかば趣彼国者は死は多生は稀也からくして行付たりしかば殺害謀叛の者よりも猶重く思はれたり」(『法蓮鈔』建治元年4月という)と書き残しているように、佐渡に流された人たちの多くが佐渡で生涯を閉じており、自身もその地で生涯を閉じるかもしれないと覚悟していただろう。しかし、佐渡での厳しい環境が、自らが弘めようとしていた法華經の教え、そして自身の立場の確証を得ることとなり、『開目抄』(1272(文永9)年)や『如来滅かいもくしょうごごひやくさいしはんじんほんぞんしょうにょらいめつ後五五百歳始観心本尊抄(観心本尊抄)』(1273(文永10)年)などで人間性や教えを明らかにした。そもそも法華經は、聖徳太子撰とされる「三經義疏」の一つであり、古くから日本に伝来していた經典の一つであった。1274(文永11)年に日蓮は赦免されるが、佐渡に遺した足跡は多い。

1 1966『新潟交通20年史』参照

2 1966『新潟交通20年史』参照

3 1966『新潟交通20年史』より引用

4 山本修之助・中俣正義 1979『日蓮の佐渡』参照

5 丸茂龍正「日蓮聖人の題目論—佐渡前後における相違について—」参照

佐渡観光のなかの日蓮の足跡

佐渡での日蓮の足跡を辿ると、必ず根本寺・妙照寺・妙宣寺の「佐渡三本山」が挙げられる。三本山のうち根本寺は、塚原配流の地であり、『開目抄』が著された。また、江戸期には相川金山の山師味方但馬⁶の外護をうけ、現在の山容となるなど相川金山との繋がりも興味深いものである。

妙照寺では『観心本尊抄』が著され、「大曼荼羅」を書き記し、教義を確立したところでもある。三本山の他にも、日蓮関連の史跡・霊蹟・名所等は多くあり、それらを辿ることは日蓮信者からすれば、非常に感慨深く、当時を回顧しながら時を過ごすことができる「聖地」である。大正期以降には、巖谷小波⁷や大町桂月⁸など多くの文人墨客が、佐渡に来島し日蓮の足跡を辿り、句を詠んでいる。この頃は個人または少人数で日蓮が過ごした佐渡を巡る人がほとんどであったと考えられるが、「配流の地」としての見方だけではなく、「日蓮の原点」を確認する地として注目を浴びていたことは言うまでもない。

また、佐渡での日蓮の動向は時を経て島外にまで普及している。例を挙げるならば、当時、佐渡の玄関口であった松ヶ崎に上陸し、小倉峠を越え配所の塚原に向かう道中に休憩をした御梅堂がある。もとは「藤梅堂」と呼ばれ「御梅堂」は明治末期以降に名付けられたものである⁹。当堂にある梅は「星降梅」と呼ばれ、佐渡市指定記念物となっている。本阿弥家に伝わる伝本阿弥光甫作の「本阿弥光悦坐像」（江戸時代・17世紀）は、この「星降梅」が使われていると伝わっている。¹⁰本阿弥光悦¹¹は熱心な法華信者であったことから、光悦が書き写した日蓮の御遺文や書簡などが多く遺っているが、佐渡にもあるかは定かではない。しかしながら、佐渡で育ったものが佐渡以外の地で、形となって今日まで大事に保管され、生かされていることは非常に喜ばしいことである。



図1 「佐渡日蓮大聖人御霊蹟めぐり 定期遊覧バスの御案内」リーフレット

観光という点では、佐渡博物館の収蔵資料には昭和20～30年代以降の観光パンフレットなど観光関係の印刷物が収蔵されており、その中には日蓮関係のパンフレット等も数点ある。その一つに新潟交通株式会社佐渡営業所が発行した「佐渡日蓮大聖人御霊蹟めぐり定期遊覧バスの御案内」（図1）がある。ここでは、日蓮信者向けの定期遊覧バスが設けられ、団体だけではなく、1人での利用も可能と紹介されている。

昭和30年前後の観光について、当時の「佐渡新報」の記事を見ていくと、

- ・佐渡一善光寺新観光ルート 景勝地保護に国立公園協会を結成（昭和27年2月1日付）
- ・小木一直江津 小木一寺泊 5月航路再開と決る 佐渡汽船旅客輸送陣に完璧（昭和27年2月13日付）
- ・佐渡観光協会結成 観光業者一丸として（昭和27年2月19日付）

などの記事が見られる。昭和27年2月19日付の記事では、「新潟交通の発起で郡内観光業者を一丸とした佐渡観光協会を結成しようと17日八ハタ観光ホテルで支庁観光係、佐渡汽船、相川、両津各旅館代表者が参集して協議した結果、土産物商、料理屋、写真屋等も広く呼びかけて結成することとなった」と記載されている。この年は、日蓮立教開宗700年という非常に大きな節目の年であり、佐渡と日蓮は蜜な関係であることから観光の目玉にしたい、また多くの人が佐渡に来るであろうということから、一丸となって迎え入れようという意向があるかに思われたが、実際観光シーズンを迎えると、「日蓮を忘れた佐渡観光宣伝開宗七百年祭に関する宣伝文一行もなし」（「佐渡新報」昭和27年4月9日付）とあるように、佐渡郡内観光業団体や、県観光協会のポスターやリーフレットに日蓮開宗700年をテーマとした宣伝はなく、各方面から厳しい批判の声が出た。しかしながら「観光が宣伝をしなかった」というだけでなく、日蓮立教開宗700年の記念事業として、島内の日蓮宗寺院も佐渡を離れ、身延・伊豆・鎌倉・房州の霊蹟巡拝に離島してしまっていることを考えると、この節目の時に「佐渡に寄らなければ」という気持ちにさせるだけの観光と史蹟の魅力発信を意識できていなかったことが悲しい。

6 1563-1623. 相川金山の山師。

7 東京出身。童話作家。大正5年、昭和2、同6年来島。

8 高知出身。書家。大正13年来島。

9 畑野町史編さん委員会1985『畑野町史信仰編』参照

10 東京国立博物館特別展「本阿弥光悦の宇宙」展示参照

11 1558-1637. 京都出身。書・陶芸・漆芸に優れる。

昭和27年に佐渡観光協会を結成し、島内各所に協力を呼びかけていく一方で「汽船、道路、旅館の整備が急務 佐渡のドル箱、観光客受入態勢」（「佐渡新報」昭和29年1月10日付）とインフラの整備が追い付いていなかったことが問題となっていた。「4日間に観光客が一万人来島 お寺が宿屋に 男の車掌も活躍」（「佐渡新報」昭和29年5月5日付）と、ゴールデンウィークに集中して観光客が来島したことにより、旅館等だけでは対応できず、急遽お寺を宿としたようだが、もともと佐渡島内には宿坊がほとんどないため、対応に苦慮したことが伺える。宿坊は遠くからの参拝者が、翌朝の本山の朝勤に参列するために前日宿泊する坊（道場。現在は坊でもお参りできるように本堂等を整備しているところが多い）であり、日蓮宗の場合、総本山である身延山久遠寺の門前には約20の宿坊が立ち並ぶ。身延の宿坊は創建の古いものは1200年代となり、長く絶えず多くの参拝者がいたことを示している。佐渡に宿坊がないのは

①江戸期以前は、島外から観光や参拝にくる人が少なく、近くで宿泊できる場所の確保が可能。

②坊を管理できる僧の不足。



日蓮宗佐渡三本山御指定旅館「丸金旅館」パンフレット

等の要因が考えられる。のちに妙照寺内に設置された佐渡史蹟観光協会や日蓮宗佐渡三本山指定の旅館ができたことをみると、宿坊がない代わりに各旅館等に協力を仰ぎ、宿泊料を抑え、宿泊先の確保だけでなく、費用面でも佐渡への観光の敷居を少しでも低くしようという配慮がなされたが、根本的な解決にはなっていなかったのではないだろうか。

昭和28年の観光客の内訳をみると約1割が修学旅行、2割が日蓮宗を主とする宗教団体、残り7割が一般観光客となっている。同年の観光客は約7万人であったことから、約1万4千人の島外からの日蓮関係の観光客を受け入れ¹²、「いかに日蓮の足跡を辿りながら佐渡を満喫してもらうか」と各寺院が奔走したことは安易に想像がつく。昭和30年頃の「縁起塚原山根本寺」を見ると当寺の縁起とともに「佐渡霊跡巡り御案内」と銘打ち「霊跡参拝兼観光コース及自動車料金」

などが記されていることは、佐渡の魅力の一つである「歴史」の部分、日蓮宗寺院と観光が連携し発信しているように感じられる。もっともコースに入った寺院には少なからずメリットも大きい。寺社仏閣を維持するためには、信者だけでは維持していくことは難しく、外からの収益が不可欠であり、観光客の受け入れは、寺社仏閣を維持・存続にも大きな意味を持つ。

佐渡への観光誘致には、交通機関の整備も重要であり、佐渡汽船や国鉄（現JR）などとの連携も取られた。昭和27年に上越線急行「越路」が運転を開始し、これまで9時間強かかっていた新潟―上野間を約6時間で繋がるようになった。また、小木―直江津、小木―寺泊をつなぐ汽船の運行が、観光客の渡航拡大に大きな存在となった。

昭和31年に新潟県・新潟鉄道管理局が発行したリーフレット「佐渡と越後」には、「団体貸切観光バス」や「定期観光バス」のほかに「日蓮宗団体コース」が別にコースが設けられ、名実ともに「佐渡観光のはじまりは日蓮」となっていく。

佐渡観光を揺るがした問題

佐渡観光が徐々に世間に認知され、観光客が増え始めた昭和29・30年と大きな問題が起きた。

① 3つの海難事故

- ・汽船洞爺丸^{とうやまる}遭難事件（昭和29年9月26日）…台風15号（洞爺丸台風）の接近により、青函航路で日本国有鉄道（国鉄）の青函連絡船「洞爺丸」が沈没。死者1,172名の大惨事となった。
- ・機船内郷丸^{せいこう}遭難事件（昭和29年10月8日）…相模湖（神奈川県）において旅客定員の約4倍にあたる修学旅行生75名と先生2名を乗せた遊覧船「内郷丸」が運航中に浸水、沈没し中学生22名が死亡。
- ・汽船紫雲丸機船第三宇高丸衝突事件（昭和30年5月11日）…連絡客船「紫雲丸」と連絡貨物船「第三宇高丸」が、濃霧のなか香川県高松沖合で衝突。紫雲丸は沈没し、船客・乗組員122名が死亡。レーダーという最新式の航海機器を装備した船舶間の事故であり、社会に大きなショックを与えた。

¹²「佐渡新報」昭和29年1月10日付参照

②イカ中毒事件

昭和30年6～7月に佐渡観光に来た松本観光団、福井観光団、三条市観光団、新大農学部講習生、群馬蛋行試験所内口業講習所職員など計157名がイカによる中毒症状を起こした。毒性プランクトンが原因とみられた¹³。

昭和30年の佐渡汽船乗船客数は、前年より約3万人減少したとされ、その原因に①相次ぐ汽船の沈没事件②イカ中毒事件③インフレによる旅行資金の減少などが挙げられたが、観光客だけでなく一般乗船客も減少しており、佐渡の観光業は大きな打撃を受けた。

佐渡観光の回復

昭和29・30年に起きた海難事故は、佐渡で起きたものではないが、船に乗ることへの不安で、多くの人が海を渡ることを自重したのは仕方のないことである。

昭和31年1月には、佐渡汽船、県商業観光課、交通公社など県内の観光関係者が夏の佐渡観光の誘致に向け協議し、6月1日に新造船の就航を大々的に宣伝、記念ポスターやパンフレットを配布、また、4月に東京三越で「佐渡観光と越後の物産展」を開催するなど観光に対する不安を払拭するために尽力、同年以降観光客が回復し、以後観光客は増えていった。

おわりに

佐渡は、日蓮の生涯の中でも最重要点の一つであり、その足跡を辿ろうと多くの人がこの地を訪れた。佐渡に配流後、多くの書状に佐渡での様子などが記されているが、佐渡での生活でまだ解明されていない事案もある。ただ、日蓮が歩んだ道を辿ることは、日蓮が佐渡で何を見て、何を感じたかを考えるヒントとなる。

現代では、歴史的景観よりも写真映えする景観を佐渡の魅力として発信している方が多くみられるが、観光客の数は減少傾向にある。何ができて何ができないかを知り、佐渡の「新しい見せ方」などを、島民みんなで考え広めていくことが、これからの佐渡の方向性になり、我々が成すべきことと感じている。

参考文献等

- ・新潟交通二十年史編集室1966『新潟交通20年史』新潟交通株式会社
- ・山本修之助・中俣正義1979『日蓮の佐渡』新潟日報事業社
- ・畑野町史編さん委員会1985『畑野町史 信仰編』
- ・本間守拙1989『日蓮の佐渡越後一遺跡巡りの旅』新潟日報事業社
- ・山本修之助1976『佐渡の順徳院と日蓮』佐渡郷土文化の会
- ・新潟県立佐渡農業高等学校1992『日蓮聖人佐渡霊跡研究』
- ・山本仁・本間寅雄1996『定本佐渡流人史』郷土出版社
- ・「佐渡新報」
昭和27年2月1日、13日、19日、3月6日、7日、13日、4月9日、16日、7月12日
昭和29年1月10日、5月5日
昭和30年1月11日、4月29日、5月14日、6月8日、10日、24日、25日、27日、7月5日、11日、11月2日
昭和31年1月6日、29日
- ・観光パンフレット
1956「縁起 塚原山根本寺」、新潟交通株式会社佐渡営業所「佐渡日蓮大聖人御霊蹟めぐり。定期遊覧バスの御案内」、「佐渡史蹟観光協会指定旅館案内」
1935「佐渡國一の谷略縁起」、新潟県・新潟鉄道管理局1956「佐渡と越後」、新潟県・新潟鉄道管理局1957「佐渡と越後」、日蓮宗佐渡三本山御指定旅館丸金旅館「佐渡案内」
- ・国土交通省海難審判所「日本の重大海難」
<http://www.mlitt.go.jp/jmat/judai>

¹³「佐渡新報」昭和30年7月5日付参照

【前号追記】

三太夫その後

池田 哲夫 貞包 健良

はじめに

前号で、「開墾師三太夫と開墾鋤」について報告したが、うかつにも「岩木文庫」に川上喚涛による三太夫についての記述があったのを見逃していた。

本稿では、後日のためにその後知り得たことも加え追記しておきたい。

岩木文庫

岩木文庫は明治40(1907)年、佐渡郡役所¹が『佐渡国誌』編さんのために郷土史家岩木 拓^{ひろむ}を編さん主任として開始したもので、大正4(1915)年に打ち切られるまで進められたものである。諸事情で刊行されたのは1巻のみで、岩木の収集した膨大な資料は未刊行のまま旧金井町図書館(現佐渡中央図書館)に「岩木文庫」として保管されており、その一部は、『佐渡近世近代資料集 一岩木文庫一』²上下巻として金井町教育委員会から刊行されている。

本稿で追記する資料は未刊資料「佐渡国誌資料集 巻6(人物伝記集)」に記述されているものである。

川上喚涛による三太夫の記述

川上喚涛((安政3)1856~(昭和9)1934)は旧金井町泉に生まれ、のち旧両津市和木に移住し佐渡の水産などの産業振興に尽力するとともに歴史学・民俗学などの文化面にも関心を持ち『佐渡国誌』の編さんにも協力している。記述の年月は不詳であるが、岩木の求めに応じて書き残したものと思われる。

故人三太夫を追賞するの議 喚涛

本郡近世の開墾土方に付て革新を為し、且つ屋根瓦製造の嚆矢としての三太夫なる人ありし事は誰も知り居る。三太夫仕事・三太夫鋤^{など}[図-1]杯の方言、今尚存するは慥^{たしかなる}成証明なり。

其の人ありし事は誰も知ておるが、其人の伝記と其人の末路を委しくする人は稀なり。

近頃土方の実業よりも(からカ)、煉瓦営業者よりも(からもカ)多少同情の声を発し、何か

三太夫の靈魂を追吊端緒はなきかと云注文に付、拙者は少々調査して見たれば、大略左の各項丈け見出した。

1、生国不詳なれ共、米沢の人なりと云者多し。

1、妻を携えて来り、本郡にて三人の子供あり。兄は太郎と称し、次と末子とは男か不明なり。

1、始めは所々土方を業としたらしく、後には多少信用と資本とを得たらしい。

1、釜屋村の官林を払受けて(鬢^{びんじろざか}白坂より相川へ向かって左手凡4~5丁の処)³住居を構え、瓦製造を創業したり。是には時の行政官も肩入れしたらしく伝わるは奨励の意味か。⁴

1、文事(文字カ)は勿^{なか}りし由にて「三太夫の証文で仮家計」という諺あり。

1、子供三人は同じ年痘瘡にて死亡したり、引続き妻も病死したり。

1、後妻として青木村正法院の女「ツヤ」を娶る⁵。

1、天保10(1839)年前後に三太夫も没したり。

1、檀那寺不明。

1、遺産としては左の通り此外ハ不明也

家 今は釜屋の横地寿一方に移してあり

納屋 近年迄笹本弘海方に移しありしも近年解体したり

土蔵 今は湯端森平方へ移しあり。

1、遺妻に後夫を迎えて遺業を継承せしめたるも数年にして廃業(せ)り。

1、製造品の存するは、釜屋の佐左エ門方に鬼面(瓦製)1、釜屋の仲間堂に人形1、夷町の税関所隣の土蔵屋根瓦の幾分等なりと。

右の外見るも哀れなるは三太夫の屋敷跡に高さ3尺直径6尺位の円形の塚あり。是社ノ3人の子供と夫婦の骨を埋めし墳墓なりと村人の説明なり。

此外に墓も檀那寺も知る人なし。一滴の泪ある人は此際形計りなり共、石碑でも建て靈魂を慰め生前の功績を追賞したきものなり如何。

彼の此地に瓦製造を創始するに付ては、土質と薪財と運搬の適当なを撰びしなる由、其实業者の評なり。

(以上)

改行、句読点、(かな書き)は筆者が加筆した。

¹ 明治30(1897)年にそれまでの雑太・加茂・羽茂郡の3郡が佐渡郡に統合されたことにともない佐渡郡役所を相川に置くことになった。

² 1994(平成6)~95年金井町教育委員会発行

³ 国道350号線佐渡空港入口より空港方向に3~4分歩いたところで、現在資材置き場や山林になっているところと思われる。

⁴ 研究ノート2号参照。

⁵ 『新穂村史』(1976)参照。

三太夫の形跡

三太夫の居住地(窯跡)とされる場所は佐渡空港滑走路近くにある。現在は資材置場や山林になっているが、資材置き場として造成当時(昭和40(1965)年頃)には瓦やすり鉢などの生活雑器の破片も多く見られたという【写真-1】。

三太夫が窯業を行っていた秋津から潟上などにかけての一带は、陶土として適した良質の粘土や赤土の地帯が広がっている。松食い虫の被害や開発などによって今は少なくなったが、このあたり一带は窯の燃料に適した赤松林が続き、周辺の旧吉井地区では近年まで瓦や煉瓦などが製造されていた【写真-2】。

三太夫窯の伝統を受け継ぐものかは不明であるが、両津郷土博物館の近辺には瓦を焼いた窯跡と伝えられるところがあり、盛り土が崩落し凹んだ場所を見ることができる。



【写真-1】住居址と伝えられる場所付近には畦状の土を盛った跡が残っている



【写真-2】

最近電柱設置のために掘った掘削跡からも良質の粘土がみられる



【写真-3】秋津地区には屋根に地瓦が載っている民家もあり、三太夫瓦の可能性もあるという



【写真-4】同上棟瓦

おわりに

秋津地区は両津郷土博物館の所在地で、筆者は勤務地としてかかわっていながら、文献等の見落としのあったことを恥じている。今後、伝承やそれにまつわる文字資料などを丁寧に「あるいて・みて・きく」ことの必要を痛感している。

地域で知り得た事は、極力地域へお返ししたいので情報提供をいただきたいと思っている。ささいなことと思われることでも、佐渡の歴史や文化の発見につながる事が多いので、ご協力をお願いしたい。

文中、差別に関する用語がみられるが、原本の資料的な価値を尊重し原本表記にしたがった。

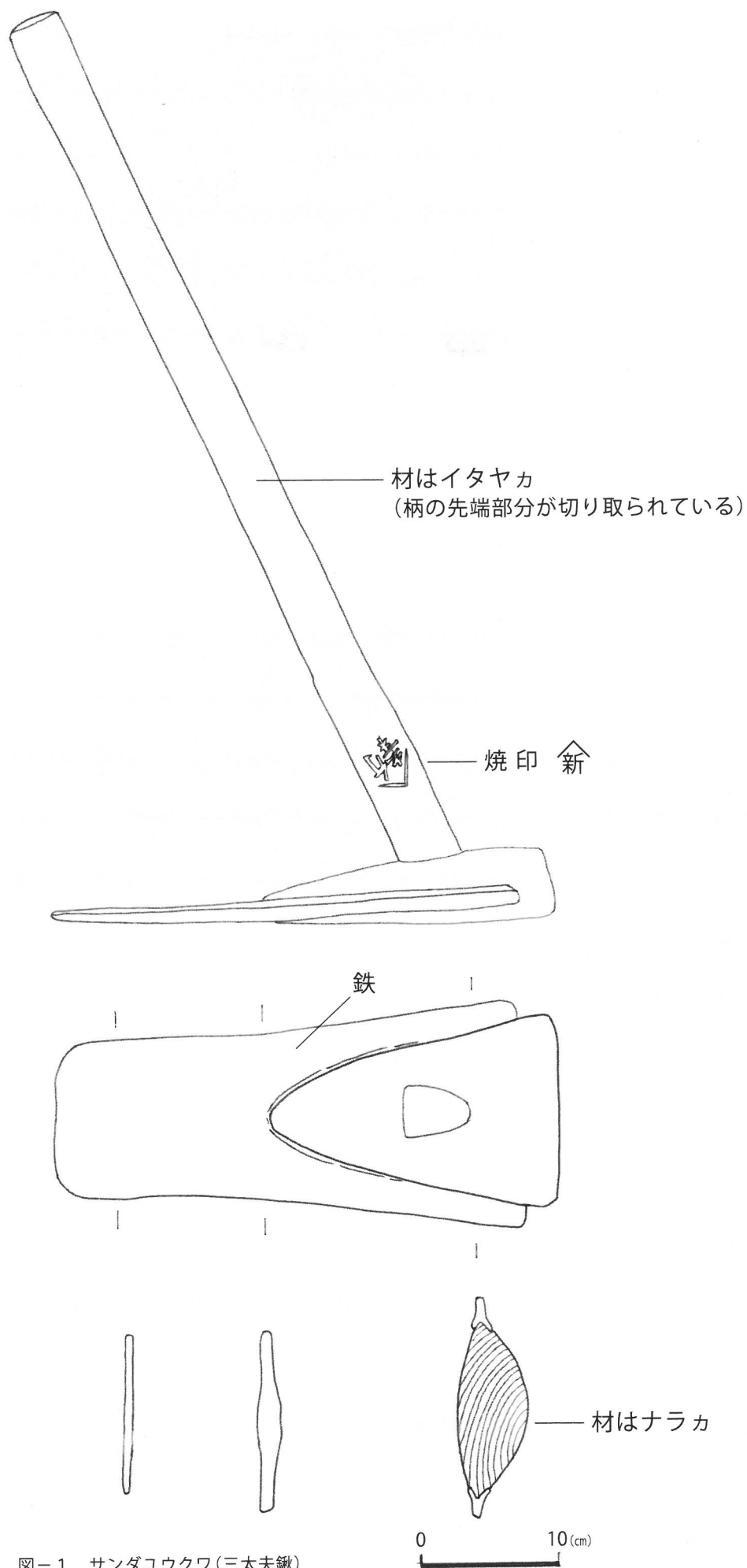


図-1 サンドユウクワ(三太夫鍬)
重さ: 2.4kg 作図 相羽理恵

吉田東伍記念博物館見学記

市橋 大輝

はじめに

筆者は、今年7月から佐渡博物館に学芸員として勤務し、学芸業務にあたっている。学芸業務を遂行するには、より多くの博物館を見学し展示手法や運営方法などを学ぶ必要があると考え、休日には県内の博物館巡りを心掛けています。大学では地理学を専攻していたこともあり、日本における歴史地理学者として著名な吉田東伍を館のテーマとした「吉田東伍記念博物館」(新潟県阿賀野市)を見学したので、その時の見学記を報告したい。

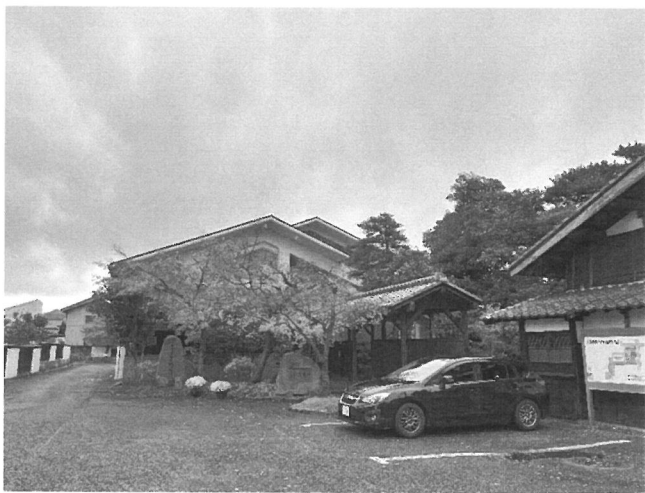


写真 吉田東伍記念博物館

展示と照明

博物館は、吉田東伍が幼少期を過ごした生家と隣接して建てられており、中庭からは、生家の見学が可能である。

常設展は、入口から右回りに年代を追って資料を展示している。展示室の壁面は黒色で、全体的に資料保存のうえから照明を落としているが、資料にあわせて見やすいように照明も配慮されている。

他にワークスペースも設置されており、そこには吉田

東伍がこれまで出版してきた著作物やゆかりの資料、地名に関する資料が、展示されている。展示物の中には、能楽の大成者世阿弥のことや吉田により発見され校註、刊行された「世阿弥十六部集」が展示されている。なぜ歴史地理学者の吉田東伍が、「世阿弥十六部集」¹と関わりがあるのか、興味を引いた。

吉田東伍の略歴と能楽研究

博物館の解説によれば、吉田は1864年、越後国蒲原郡保田村(現在の新潟県阿賀野市)で生まれ、9歳からは、「必勤舎」²と呼ばれた学校に通った。その後、新潟学校³に通うが、「学校はわかりきったことしか教えてくれなかったので行く気がしない」と言って、13歳で学校を辞め、家業を手伝いながら、図書館等で家伝の古記録、漢籍などを読んでいたという。吉田は17歳のとき地元安田の歴史書「安田志料」⁴を執筆しはじめた。地元安田の歴史や地理について興味を湧いてきたのは、この頃からではないかと言われている。

吉田家へ婿養子として入った後も各地を歩き、「日韓古史断」⁵出版を経て、現在でも歴史地理学の基礎資料として活用される「大日本地名辞書」を13年の歳月をかけて完成させたという。

吉田が44歳の時に発見し、解説し刊行したのが「世阿弥十六部集」であるという。また、続編として「能楽古典禅竹集」⁶も刊行している。

筆者は吉田の歴史地理学者としての一面しか知らなかったが、科学的に能楽研究が進められる嚆矢となったとされる「世阿弥十六部集」の発見が吉田であることに驚いた。

吉田が深く能に関わるきっかけは、1904年に能楽文学研究会⁷に参加したことであろう。また、1899年には、日本歴史地理研究会⁸に参加し、喜田貞吉や能楽文学研究会⁹に共に参加した久米邦武¹⁰らに出会っている。吉田は早稲田大学で後に能楽文学研究会に参加した高田早苗¹¹にも出会っている。

1 銀行財閥安田家の書庫から見つけた秘伝書を元に1909年に吉田東伍が校註し刊行。

2 1872年に学制が公布され、父の木七達の学校開校に向けた運動によって開校。

3 1874年に官立新潟師範学校が設立され、合併と改称を経て、新潟学校になった。

4 1881年から書き始めた吉田東伍が生まれ育った安田について書かれた地誌書。

5 1893年に出版され吉田東伍最初の単行本。日本と朝鮮半島の交流の歴史を述べている。

6 世阿弥の娘婿である金春禅竹の伝書を紹介した書籍。

7 池内信嘉が能楽に関する研究の場として立ち上げた。

8 1899年に設立。後の日本歴史地理学会。

9 日本史、地理学者。考古学や民俗学の資料を活用し、古代史研究の進展に寄与した。

10 帝国大学、東京専門学校(後の早稲田大学)の教授を歴任。歴史学者。

11 東京専門学校の創立に参画。文部大臣、早稲田大学総長を歴任。

1907年には、「大日本地名辞書」の出版祝賀会が開かれているが、そこに喜田貞吉や高田早苗なども参加しており、交流が進んだという。

1908年、吉田は、安田家の蔵書から世阿弥伝書「世子六十以後申楽談義」¹²を発見、「能楽」¹³で報告し、翌年「世阿弥十六部集」を刊行した。[千田2003]

「世阿弥十六部集」の刊行により、それまでは明確でなかった世阿弥の質の高い能楽論の骨組みが一挙に明らかにされ、能楽界に衝撃を与え、能楽の発展に繋がった。

また、「世阿弥十六部集」に収められている「金島書」は、世阿弥が流された1434年の都から佐渡までの様子や1436年の佐渡の様子、世阿弥の晩年の様子を知ることができる。[本間1997]

佐渡博物館に展示されている同書が、佐渡と縁の深いものであることを再認識した。

おわりに

吉田東伍は、自身の故郷安田の地誌で地域を知り、その後各地を回り、多くの人と出会って日本全国の地誌を完成させた。「世阿弥十六部集」を発見した頃、能楽の再興に向けて雑誌の「能楽」が刊行されたことや、能楽文学研究会が発足していたことにより、能楽研究の高まりもあって、能楽に関する情報も発信しやすい状況であったといえる。筆者は世阿弥の伝書の発見は、吉田が歴史地理という専門分野のくりに縛られることなく、勉強心が旺盛であったからこそ出来た偉業であったと考える。

筆者も吉田のように、佐渡を出発としてさらに全国へと視野を広げて行きたいと考えている。最後に、吉田東伍記念博物館をご案内くださった、渡辺史生様に御礼を申し上げます。

参考文献等

千田 稔2003『地名の巨人 吉田東伍 一大日本地名辞書の誕生一』

本間嘉晴1997『佐渡中世流人 世阿弥』

吉田東伍記念博物館1999『小伝 吉田東伍』

吉田東伍記念博物館2002『歴史家 吉田東伍 一地名・民衆・生活一』

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館2009 図録

『世阿弥発見100年—吉田東伍と能楽研究の歩み—』

渡辺文男2017 企画展 吉田東伍の「世阿弥発見」
プランニングシート

渡辺史生2010『吉田東伍の「世阿弥発見」』

¹² 足利時代の猿楽について記載。小杉梧邨が所持していたものを吉田東伍が校註し刊行。

¹³ 停滞している能楽の復興のため池内信嘉が刊行。